裁判官に訴えられても困るんでね

紅葉紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
裁判官に訴えられても困るんでね

【Ｎコード】
Ｎ６５６２Ｙ

【作者名】
紅葉紅葉

【あらすじ】
その学校は、内閣、国会、そして裁判所に分かれている。内閣は一般的には生徒会、国会は生徒総会、裁判所は教師を表す……と、思っていた俺がバカだった。
最強知能犯を友人に持つ旭川真一は、何故か裁判長で生徒の常盤深代、許婚と名乗る柏白樺によって、裁判所側に就かされてしまう。明らかに間違っているのに真実だと思って突き進む、冤罪系青春コメディー。

case1・友人の受難

「……ここは……」

目を覚ますと、俺はなにやら真っ暗闇な部屋で椅子に縛り付けられていた。周りは何も見えない。
確か、俺は5月の高校一発目の中間試験が（二通りの意味で）終わって、友人を探そうとほっつき歩いてたところだったはず……。
あと、何か金属的なもので殴られて、意識が飛びかける中、ハプニングチュー的なものもあった気もしないでもない。いや、あれは明らかに故意だった。長かったもんな、おかげできれいに気絶出来たぜ……。

「……あれ？」

……おかしい。
こんなに立派な回送シーン入れたなら、普通は
『目覚めたか、旭川真一。これからお前を改造する』『ナ、ナンダッテーー！？』
みたいなのがあるはずなのに、人気はない、機械もない、戦闘員一号もいない、仮面男も案の定……。
これってなんかのドッキリとかじゃないのか？よくあるあれとかこれとか……

『ちょっ、あたいにはムリだよ！こーゆーの！』『何を言っている。あいつを拉致したのあんただろう。自分で処理なさい』

……何か外から聞こえる。なんか画策みたいなんがありありと聞こ

えてくるな。
……これ、聞こえちゃダメじゃね？聞こえたらダメなパターンだよねこれ？

「今北産業！」『ひっ！？聞こえてた！？』

声をかけると、やっぱりびっくりした様子で反応してきた。聞こえちゃダメなやつだったんだな理解した。外の女の子達にとっては、この古いネットスラングを知ってるかはどうでもいいようで、すぐに残酷な対応を決めるという行動に出てきた。なかなかのSだな。

『ほらさっさと行けや！』『いてっ！いやぁ…！きゃんっ！』

少し光が差し込んだ後、誰かが蹴りこまれ、また真っ暗闇に戻った。がちゃっという残酷な音、鍵の閉まる音が聞こえる。対応というには余りにも非道、かつ、最も精神崩壊には効果的な拷問手段。
そう、監禁だ。
担当者は女の子らしいのがまだ救いだが。いや救いじゃねぇよ、Sだったら死亡のお知らせが流れるだろ。蹴られ、殴られ、逆レイプ……最後以外いやだ、最後のやつだけしてください。

「あ、ドア閉めないでよ～！ふかまよ～！怖い、怖いよ～！助けて～！」

確実にSじゃあないっぽい女の子の悲鳴が聞こえる。悔しいのか、嬉しいのか、俺は何故か舌打ちをした。閉所恐怖症か、あるいは暗所恐怖症か、女の子はドアをがんがん叩くが、外の仲間は高笑いする。これ俺じゃなくて女の子への罰ゲームｅｔｃ……じゃね？

『そいつを解放したら？電気くらいならつけてくれるぞ。さて、ど』

「怖い怖い怖い怖い怖いよ〜！電気！電気電気電気つけて〜！」

女の子の悲鳴は続く。

『電気は内側』「ふぇぇぇん！ふかまよのバカァァァァ！怖いよおぉぉ〜！」『……白樺の声……きゃわいい……襲いたくなっちゃうかも……（＊д＊）ハァハァ』

ダメだ向こう。腐ってる。百合万歳……じゃないや。

とりあえず俺はこの縄を抜け出さないと何もならん、俺に何も変化がない！

このままだと叫んでる女の子が可愛かったとき、何も性的な……もとい、お互いを温めあうこともできないじゃないか！

必死に手をバタバタし、椅子を揺らす、脱出方法？んなもん知るか！

そんな時、

「ひぁぁぁ〜！かしゃっ、今っ、かしゃって、かしゃっかっかしゃっ、かしゃかしゃ…ふぇぇ……あたいもうこんなのやだよぉ……」

いきなり可愛い声がこだまする。かしゃ、かしゃ……何の音なのやら、もうちょっとエロティックに……

……

もしや、俺が足を動かした時に当たった紙の音か！？

どんだけ聴覚いいんだか、とりあえずもう一回バタバタしとくか。

かしゃ……かしゃ……

「い、いやぁぁぁ！」

もう頭の中では悶える女の子の図でいっぱいだ、つまり妄想ですね

わかります。とりあえず声をかけてみよう。全てはそこから始まるというのが鉄則。

「……大丈夫か？」

「……ふぇ？旭川くん？」

やべぇかわいい声出すな。涙声交じりで名前呼びは反則過ぎる。段階だ、こういうのは段階が重要なんだ。灰色でも真っ黒でもなんでもいい、段階だ。

「……名前は？」

……閃いた段階が余りにもストレート過ぎた。

どうした俺、ギャルゲーで磨いた落としテクはどこへ行ったんだ俺！

「あたいは……柏白樺。かしわ、しらかば」

「顔、見せてよ。電気をつけてさ」

「電気って……どこ？あっ……これか」

ぱちっ

ストレート過ぎた段階のせいで電気がついた。

利益なのか、不利益なのか今の俺には判別出来ない。多分不利益だろうな。

まあとりあえず電気がついたなら安心だ。電気は本当に安心感を与えてくれる。

ここは見たところ……談話室みたいだ。どこかの部室だろうか、書

類が散乱し、本棚はファイルで埋め尽くされている。視力があまり良くないので、何かは判別できない。
ただ、テレビが3台とか、パソコンが5台とかあるのは確認出来た。なんか映像とかの同好会なんだろう。
そして、部屋の隅の椅子に俺は縛り付けられていた。対角の位置にある電気のスイッチに、柏白樺はいた。

柏白樺……可愛い。
セミロングの茶髪に、エメラルドのように光る緑の目、肌は雪のように白く、暗所の怖さに震えるその姿は小鹿のように弱々しい。
涙目でこちらを見つめられると……守ってあげたい。そんな感情が沸く。

「うう……旭川くん……」

がくがく震えながら、こっちに近づいてくる柏。警戒しているのか、ブレーカーが落ちるのが怖いのか。
とにかく落ち着かない感じがある。

「何で俺を縛ったんだよ」

「……旭川くんは、鎌倉繍と一緒にいるんでしょ……？尋問のためだよ……」

じ、尋問……なかなかえげつないことを言うな……。ちなみに鎌倉繍、かまくらしゅう、ってのは、俺の戦友であり、悪友であり、学校一の問題児だ。成績とかは問題無いが、知能犯として有名になっている。
中三の時の修学旅行で、伝説の女子風呂場のぞき見を達成した残念

なイケメン。
今は二次元へ堕ちてるが、いや俺が堕としたんだが、またいつ覚醒するかわからない。もしかしたら三次元の美少女達に襲いかかりはじめるかも全く分からん。
危険故にモテるというハーレムなリア充でもあり……
そんな奴の情報を友人を尋問してまで手に入れたいというのはよく分かるが……

「手に入れてどうするの」

今のは推論の域を越えられない。所詮、推論だ。
まだ何の役に立つかも分からないのに、友人を拿捕するリスクを犯してまで……そんな価値はないだろ。

「ええっと……それは」『それは私から説明する』

っとここでさっきの百合女が登場か……。鍵の開く音が響き、ドアが開く。
尋問が本格化してきたな。
堂々と、どや顔で入ってきた女の子は、黒髪で、ポニーテールで、なかなかの体つきをしてんのに百合……けしからんもうちょっと柏を虐めてやれ。いっそのこと俺が虐めてやろうか。
じゃない違った間違えた。尋問って何されるんだ？
下半身産業に強制従事させられるくらいだったら喜ぶけどな……違うよな……。

「なんだよ」

「まず、旭川真一。部活には入ってないよな？」

……なにそれ、部活なんてどうでもいいだろ。
繍のことなら教えるから、さっさと解放しろ。

「興味もなさそうだ」「んなもん勝手にさせろよ」

「まぁまぁ、とりあえずこの部活に入れ。部活に精進し、我が永遠の宿敵、鎌倉繍を倒すのだ！」

鎌倉繍が永遠の宿敵ね……あいつ強姦でもしたのか？やりかねない感じあり……まさか、
手遅れだったか……チッ、先を越されたぜ……。
じゃ、友としてあいつを正しい道へ引っ張り出すこともやってやらなくちゃいけねぇのか……面倒臭い……
……部活に精進？

「……ここは何部なんだ」

「よくぞ聞いてくれたな。白樺、私達の勝ちだ」

……勝ち？

「待て、入部した訳じゃ」「旭川くんおめでと～、あたい達やっぱり運命の赤い糸で結ばれてたんだよ～。あたい許婚だからね～」

……赤い糸？許婚？
さっきからよく聞かない単語ばっかり出てくるな。
俺の語彙力が足りないのかそーかそーか……
絶対違う！許婚の意味くらい知ってるし！問題は理由とかそこらへんじゃない！

「……は？許婚？柏、お前それどういい」「ようこそ、裁判所へ。私が裁判所長の常盤深代、ときわふかまよだ、よろしく」「さ、裁判所書記の柏白樺ですっ、よろしく……ね」

こうやって、高校生活は二次元的なものになるのか。なんて不条理なんだか……

よく主人公は耐えれるな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6562y/

裁判官に訴えられても困るんでね

2011年11月20日19時24分発行